月のしずく

倉田恵美子　推薦

夜を開ける　鍵穴は月のかたちに　聖一
嘘ばかり食べてシャボンの虹消える　弘康
ゆっくりとリンゴ剥く手の隠しごと　たけお
やさしい月に心の闇を癒される　多美子
おもてうら焼いて私を炙りだす　まゆみ
新米のＵＦＯも飛ぶ太陽系　まゆ
演ずればどの指先も愛に見え　一舟
束にした花にさらわれそうになる　仁
タイムトンネル　自分の過去は消してある　龍一

靖国を拝んだだけで平和呆け　正美
くすぶりが強い燠となる葉鶏頭　久扇
道は道　獣は獣　人は人　哲
クーラーが親子の絆離れさせ　秀夫
望郷よはるかはるかの鬼ヤンマ　猪一郎
満月をゆっくりと押す池の水　都嗣子
みんな死に収斂されていく枝葉　万寿郎
私だけの世界にわたくしを咲かす　典子

もし
この柳誌が
あなたの目に
あなたの心に
とまったら
川柳を「感じ」に
川柳を「話し」に
おいでください。
お待ちしています……。

思うこと

宮村　典子

川柳を書き始めて十六年目になる。自分ではそんなに書いている気がしないのだが、確かにこの年数を川柳と過ごしてきた。

川柳歴四十年、五十年という大先輩からみれば、まるでヒヨコだろうが、私としては十六年も同じ趣味を続けて来られたのが本当に不思議だ。こうなったら二十年は続けて、その先はまた考えよう……と、今は思っている。

春には念願の句集も出したし、夏には十六年間の全句を、川柳句集「典子」に纏めた。

それで気がついたのが、自分の句は自分の世界というか、変わらない想いの中を、言葉を変えてぐるぐる回っているということである。

いろんな柳誌で、川柳論などを読むと、私の句は論外の川柳かもしれないが、理屈で考えたり、かたちにはめ込むのは苦手だから、このままでいくしかない。

自分の気持ちを言葉に変えて、自由に表現する一行の想い(詩)を、川柳だと思って書いている。

「川柳は人間」なのだから、生き方の違うように書く川柳も違っていて当たり前なのだ。

それを自己満足というのなら、それもよい。

書くことも、生きることも、所謂自己満足のような気がしている。

ただ、類似句には気をつけないといけない。

多くの柳誌を読み、佳句に触れていると、どうしてもそのフレーズが記憶に残り、類似句になる。

多読多作の弊害もあるというものだ。

気持ちを生み、言葉を生むという、人間だけが持ち得る能力を川柳に注ぐことで、我々はすでにある意味人間を果していることになるかも。

自己満足の尽きるまで川柳を楽しもう！

☆　☆　☆　☆　☆　☆

小さくても中身の濃い、そんな会を目指した「せんりゅうくらぶ翔」は、三年を越えて益々元気に活動している。特に最近では、県内外の大会に参加し活躍する会員が増えている。

ここを基地に、さらに自由に翔んで欲しい。